

# 大 学 史 研 究 通 信

第 106 号 2023 年 3 月 23 日 (木)

大学史研究会

第 106 号の内容：会員情報・新入会員 自己紹介、会員情報の収集について、2022 年度第 45 回大学史研究セミナー報告、大学史研究セミナー参加記、2022 年度総会報告について、2022 年度会計報告について、『大学史研究』編集委員会からのお知らせ、運営委員会からのお知らせ、編集後記、大学史研究会運営委員・事務局員一覧

## 会員情報

### 新入会員

平塚 力 会員

所属：京都文教大学総合社会学部

## 新入会員 自己紹介

### 平塚 力 会員

京都文教大学の平塚力（つとむ）と申します。専門は非営利組織論（専門職組織論）で、権力による大学への認知的支配とそれに対する大学人の対応を、明治森文相期から先の安倍政権までをいくつかの段階に区分し、国家としての歴史的な経路依存性という観点から研究しています。大学史については、政府と大学間での認知的相互作用から、2000 年代以降のわれわれ大学人を取り巻く制度的環境がどのように出現したのかを究明し得るインターナルなアプローチとして重視しております。皆様のご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

(会員情報担当：船勢肇)

## 会員情報の収集について

昨年の総会でお認めいただきましたように、運営委員会では今後の研究会の継続的な発展を目指した経費節減、そして事務局員の負担軽減のため、今後『通信』の電子化を検討しております。これに伴い配信業務に利用するため会員のみなさまのメールアドレス等の情報をお教えいただきたいと思っております。

これに加えて総会で承認いただきました日本学術会議協力学術研究団体への加盟申請において会員名簿の提出が求められているため、会員のみなさまの会員情報を収集させていただきたいと考えております。

この会員情報の収集については、ネット上の専用フォームでご記入いただきますが、URLなどを記載した往復ハガキを用いてみなさまにご連絡を差し上げる予定です。時期は 2023 年 5 月頃を考えております。みなさまご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(会員情報担当：船勢肇、事務局長：山本尚史)

## 2022 年度第 45 回大学史研究セミナー報告

2022 年 12 月 3 日（土）、4 日（日）に第 45 回大学史研究セミナーがオンラインで開催されました。参加者は 2 日間で延べ 86 名でした。

初日のシンポジウムは「表現する学生—大正・昭和戦前期の学生課外活動の検討—」をテ

ーマに開催しました。学生の活動は、それが正課であれ正課外であれ、記録として残されるものが少なく、大学史の中で扱いが難しいものの一つです。その中で、今回は、松村晶氏（久留米工業高等専門学校）による九州帝国大学のオーケストラ活動、福元真由美氏（青山学院大学）による東京帝国大学セツルメント託児部の活動、そして山本珠美会員（青山学院大学）の学生巡回講演の事例報告をもとに、全体討議を行いました。セツルメントは言うまでもなく教育活動ですが、演奏会・講演会も聴衆が存在することで成り立つものです。学生は社会から影響を受ける存在ですが、同時に社会へ影響を与える存在でもあることについて、今回のシンポジウムで十分検討できたわけではありませんが、その一端は明らかにできたのではないかと思います。

2日目の自由研究発表では、大森東亜会員（元明治大学）から「岩倉使節団と日本の高等教育」、今野翔太会員（国際医療福祉大学三田病院）から「東京帝国大学における「研究室」の研究」、川崎成一会員（名古屋産業大学・東京大学）から「大学財務史を読み解く新たな手法」、福石賢一会員（高知工科大学）から「ケンブリッジ大学工学教授ユイイングの技術者養成観」、以上4名の方から報告がありました。参加者からの多くの質問があり、活発な討議が行われました。

ご報告をいただいた皆様、参加者の皆様には、この場をお借りして御礼申し上げます。次回セミナーは対面で開催する予定ですので、今秋には4年ぶりに皆様とお会いできることを楽しみにしております。

（セミナー担当：山本珠美）

## 大学史研究セミナー参加記

松村 晶（久留米工業高等専門学校）

私は物質材料工学を専門とする研究者で大学史は全くの素人です。このような素人に大学史研究会シンポジウムでの発表という、身に余る貴重な機会をいただいたことは大変光栄なことです。山本先生をはじめとして研究会の皆様の格別のご高配に厚く御礼を申し上げます。

私は「九州帝国大学におけるオーケストラ活動」の事例報告をさせていただきました。この活動は榊保三郎教授によって始められて学生とともに発展させたもので、シンポジウムの主題である「表現する学生」とは合致していない性格だったかもしれませんが、参加された皆様からも多くのご質問などをいただきました。大変有り難く思っております。この調査研究は、九大フィルの100年史を作成するためのネタ集めがきっかけでした。最初はOBで顧問教員という立場上逃げられなかったために致し方なく始めましたが、部室に残されていた多くの古い楽譜などを直接眺めていると思いがけない新たな発見がありました。さらに榊教授が収集した楽譜が芸大図書館にあると聞いて、東京出張の機会に軽い気持ちで寄ってみたところ、想像以上に知的好奇心を刺激する楽しい時間となつてのめり込んでいきました。

ところで、来年2024年は九大フィルがベートヴェンの「第九」の一部を日本人で初めて公開演奏をしてから100年の年にあたります。九州大学ではそれを記念して「第九」の特別演奏会とともに「大学による文化創造」をテーマに様々な企画を行う計画を進めております。広く皆様にご関心を持っていただけましたら幸いです。

今野 翔太（国際医療福祉大学三田病院）

2022年12月3日（土）・4日（日）に、第45回大学史研究セミナーがオンラインで開催されました。新入会員の筆者にとっては、第一線で活躍されている研究者の方々の中で自己の研究を発表すること自体が初めてであり、オンライン方式での発表も初めてと、初めて尽くしのセミナーでした。仕事の都合で2日目の自由研究発表のみの参加となりましたが、それでもそこで得たものはとても大きかったと思います。

筆者は、4人中2番目の発表であり、『大学史研究』第31号に掲載していただいた拙稿をもとに、東京帝国大学経済学部が法科大学から分離・独立する際に「研究室」なるものが果

たした役割や機能に関して発表いたしました。質疑応答では、みなさまから多くの貴重なご意見やご指摘を賜り、研究対象を見つめ直したり視野を広げたりする恰好の機会となりました。中でも講座制との関係に関するご指摘は今後の研究の方向性にも関わる重要なものでした。その意味でこの度いただいた発表の機会は、甚だ拙いものではありませんでしたが修士論文以来取り組んできた“「研究室」の研究”というテーマの一つの結実であり、また今後の博士課程で行う研究のマイルストーンとなるものとなりました。また、御三方の研究発表を拝聴しましたが、国内外を対象とした諸研究や新たなアプローチの提起など大学史研究のもつ幅広さと可能性を目の当たりにしました。

こうした経験にもとづきセミナーで得たことを活かして参ろうと思いを新たにしました。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。末筆ではありますが、セミナー開催の労を取られました事務局のみなさまやご発表くださったみなさま、ご清聴いただきご意見お寄せくださいましたみなさまに、改めまして深く感謝申し上げます。

(セミナー担当：山本珠美)

## 2022年度総会報告について

セミナー当日の2022年12月3日(土)、Zoomによるオンラインによって総会を開催いたしましたのでご報告申し上げます。

### 《報告事項》

#### 1. 運営委員会・事務局活動報告

- ・第44回大学史研究セミナー：オンラインにて2021年12月11(土)・12日(日)開催。  
参加者 シンポジウム：43名、自由研究発表：23名。
- ・運営委員会兼事務局会議：3回(3月、11月、11月) いずれもオンライン/メール開催。
- ・運営委員 推薦委員会：1回開催(11月)。
- ・大学史研究通信：3回発行(104号、105号、セミナー号外)。

#### 2. 会員数報告

- ・2022年会員数：126名(機関会員7を含む)。
- ・昨年以降の増減：入会者4名、退会者6名。  
(会計年度との違いがあるため、会計報告の会員数とは異なる場合がある)

#### 3. メールアドレスの変更について

・これまでのメールアドレスが会員所属大学等のサーバーではじかれる事案が生じていたため、新たに以下の通りメールアドレスを変更した。

**新メールアドレス：jimu-kyoku@daigakushi.jp**

#### 4. ホームページ及びメールアドレスの管理者として、会員に委嘱することについて

- ・深野政之会員(大阪公立大学)に委嘱を行う。すでにメールアドレスの更新、HP記載情報の更新等を行っていただいている。

#### 5. 『大学史研究』のJ-stageへの掲載について(総会後の報告を含む)

- ・福留東土紀要編集委員長(当時)に2022年に手続きを進めていただき、申請中であったが、2023年2月に掲載可能となった。順次掲載手続きを進めていく。

### 《審議事項》

#### 1. 会員数増加のための具体的な施策について

- ・会員、特に、機関会員の増加に向けて、事務局を中心にキャンペーンをおこなうことが

承認された。機関会員については、年史編纂をおこなっている大学すべてに、入会を勧める。どなたかに推薦人を立てて取り組んでいく。また、個人会員については具体的に推薦したい方を事務局にご推薦いただき、事務局から該当の方へご案内のメール／文書を送付する。なお推薦者（機関）へお願いの文書を送る際には、『大学史研究』の冊子や論文等を見本としてお送りするなどの方法も検討する。

## 2. 予算、特に紀要刊行費の問題について

・現在の予算立てでは、毎年、収入をはるかに上回る支出をおこなっている。『大学史研究』編集発行費用が最も多い予算であり、この基金化も見据えて2024年以降の予算立てを考えなければならない。これまでの紀要に掲載された特集・論文等をDVDなどによって有償配布するなど収益化を進めることが必要との意見も出された。

・収益を得る方法、会費納入率の向上、紀要刊行費等の面で改善が見られなければ、年会費の値上げにまで踏み込まなければならないことは会員間で共有すべきこととして挙げられた。

## 3. 日本学術会議協力学術研究団体への加盟について

・すでに「大学史研究通信」でもお知らせしたが、大学等の任用・昇進等の場面で、執筆論文について査読の有無だけでなく、日本学術会議協力学術研究団体のジャーナルに掲載されたものかどうか問われている。『大学史研究』の発行体制が盤石となった今、日本学術会議協力学術研究団体への加盟申請を進めることが承認された。

ただし、「研究会の学会化」ということではなく、研究会、さらには紀要への認証評価と考えるべきであることが確認された。したがって、上記の加盟後も、現在の大学史研究会の運営委員会・事務局体制を変えるものではないことは総会で共有された。

## 4. 『大学史研究』編集委員長、副編集委員長の退任に伴う運営委員の補充について

・福留東土会員、福石賢一会員委員が運営委員を退任されました。お二人先生の大学史研究会への献身的なご助力に厚く御礼申し上げます。お二人の先生の退任に伴い、運営委員会として新たな運営委員を2名ご推薦し、総会において承認された。

**新運営委員：大川一毅（岩手大学）、吉野剛弘（埼玉学園大学）**

・なお、新たに大川会員、吉野会員を運営委員としてご推薦するにあたり、2022年11月28日に推薦委員会を開催した。推薦委員は犬塚典子会員、五島敦子会員、坂本辰朗運営委員長、中村勝美会員、長谷部圭彦会員、福留東土会員、山本尚史事務局長（五十音）の7名です。総会直前での対応となりましたため、現在の運営委員で推薦委員を決定させていただきました。

・現在の運営委員会の構成は、坂本辰朗（創価大学）、大川一毅（岩手大学）、船勢肇（長崎女子短期大学）、山崎慎一（桜美林大学）、山本珠美（青山学院大学）、山本尚史（筑紫女学園大学）、吉野剛弘（埼玉学園大学）の7名となった。

※氏名（所属）に下線のある委員は2023年のセミナーまでの任期です。

・吉野剛弘会員が運営委員となられたため、同会員にお勤めいただいた会計監査について新たに田中智子会員（早稲田大学）をお願いすることとし、総会で承認された。このため会計監査は、五島敦子会員（南山大学）、田中智子会員（早稲田大学）の2名をお願いすることとなった。

## 5. 紀要編集委員会の体制について

・紀要第32号の編集委員会の編成について、以下の通り報告された（敬称略）

委員長：大川一毅（岩手大学）

副委員長：吉野剛弘（埼玉学園大学）

委員：浅沼薫奈（大東文化大学）、井上美香子（福岡女学院大学）、木戸裕（元・国立

国会図書館)、中村勝美(広島女学院大学)

6. 電子媒体での通信発送と会員情報の収集について

- ・「大学史研究通信」は現在、紙媒体での郵送を行っている。しかしながら、会の運営資金の問題、及び現在の運営委員・事務局員の本務校での業務量の過多は看過できない状況になっている、そのため、これまでも総会において通信のオンライン化をご提案してきたが、出来るだけ早いタイミングでのオンライン化、メール配信に切り替えることが承認された。
- ・ただし、オンライン化は急に進めると会員の中には不利益を被る可能性の方も出てくる恐れがあるため、移行期間を設けながら行う。
- ・これらを円滑に進めるために、会員情報の収集については承認された。

7. 決算報告および予算案

大学史研究会 総会資料 (2022年12月5日)

大学史研究会 2022年度 会計報告  
(自2021年10月1日～ 至2022年9月30日)

【一般会計】

収入の部

科目	2022年度予算	2022年度実績	備考
前年度繰越金	1,934,488	1,934,488	
年会費・入会金	600,000	349,100	48名(過年度分含む)
「大学史研究」売上等	10,000	36,300	
セミナー開催経費等戻し入れ	0	0	
雑収入	30	21	利息
計	2,544,518	2,319,909	

支出の部

科目	2022年度予算	2022年度実績	備考
紀要「大学史研究」関連費用	700,000	894,186	
編集委員会会議費・交通費	100,000	27,456	
事務局会議・交通費	80,000	0	
消耗品費・手数料	10,000	2,710	振込手数料等
謝金(アルバイト)	30,000	0	
通信印刷費	200,000	160,718	大学史研究通信発送費及びインターネット使用原簿料金等
セミナー開催経費	30,000	20,000	
予備費	1,389,518	0	
諸経費	5,000	0	
次年度繰越金	0	1,214,839	
計	2,544,518	2,319,909	

特別会計及び次年度繰越金を除く 収入計 385,421  
 支出計 1,105,070  
 収入-支出 △ 719,649

【特別会計】

収入の部

科目	金額	備考
前年度繰越金	2,500,000	

支出の部

科目	金額	備考
次年度繰越金	2,500,000	

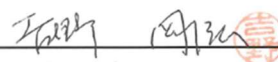

上記のとおり、ご報告いたします。事務局会計担当 山崎慎一

上記の会計報告について会計監査を実施した結果、領収書ならびに預金通帳等は、全て妥当かつ正確に処理されていることを認めましたのでご報告いたします。

監事

五島敦子 

監事

大学史研究会 総会資料 (2022年12月3日)

2023年度 予算案

【一般会計】

収入の部			支出の部		
費目	前年度実績	予算	費目	前年度実績	予算
前年度繰越金	1,934,488	1,214,839	紀要「大学史研究」関連費用	894,186	800,000
年会費・入会金	349,100	600,000	編集委員会会議費・交通費	27,456	100,000
「大学史研究」売上金等	36,300	10,000	事務局会議・交通費	0	80,000
セミナー開催経費等戻し入れ	0	0	消耗品費・手数料	2,710	10,000
雑収入	21	30	謝金(アルバイト)	0	30,000
			通信印刷費	160,718	200,000
			セミナー開催経費	20,000	30,000
			諸経費	0	5,000
			予備費	0	569,869
			次年度繰越金	1,214,839	0
計	2,319,909	1,824,869	計	2,319,909	1,824,869

前年度繰越金を除く総収入(a) 610,030 予備費と次年度繰越金を除く総支出(b) 1,255,000  
 (a) - (b) = △ 644,970

【特別会計】

収入の部		支出の部	
費目	金額	費目	前年度実績
前年度繰越金	2,500,000	次年度繰越金	2,500,000
計	2,500,000	計	2,500,000

上記のとおり、ご提案いたします。 大学史研究会事務局

(会計担当：山崎慎一、事務局長：山本尚史)

**2022年度会計報告について**

大学史研究会 2022 年度会計ならびに 2023 年度予算案につきまして、以下に概要をご報告します。

【 収入 】

2021 年度会計からの繰越金は、1,934,488 円でした。2022 年度年会費につきましては 48 名の会員より納入いただき、年会費・入会金の納入総額は、349,100 円でした。例年より年会費収入が少なくなっている理由は、通信の発行の遅延により会費請求も合わせて遅れたことによるものです。ただし、会計報告実施時点においては、概ね例年通りに年会費をお支払いいただいております。年会費をお納め下さった会員各位におかれましては、この場を借りてお礼申し上げますとともに、今後も引き続き研究会の発展と円滑な運営のために、年会費納入に対するご理解ご協力をお願い申し上げます。

また、会員の先生方のご尽力により、「大学史研究」売上金等は 36,300 円となっています。これには書店経由によりベルリンのドイツ国会図書館からの「大学史研究」の購入依頼に基づく売上金も含まれています。

【 支出 】

2022 年度の紀要「大学史研究」の出版費用は 894,186 円です。編集委員会会議費・交通費は 27,456 円、封筒等の消耗品や振込手数料は 2,710 円、「大学史研究通信」に係る通信費は 160,718 円、セミナー開催経費として講師 2 名分の謝金の 20,000 円になりました。なお、前年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の影響があり、セミナー含め、各会議体がオンラインで開催されたため、事務局会議・交通費の支出はございませんでした。次年度繰越金は、1,214,839 円となっております。次年度への繰越金を除く総支出は 1,105,070 円、収支の差は、719,649 円のマイナスとなりました。なお、先の収入に関する説明においても述べたように、会費の請求時期の遅れにより会費収入が適切に反映されていないため、本来はおおよそ 25 万円程度の収入がございます。そのため、本来であれば約 47 万円の支出超過となっております。

このままのペースで推移すると 10 年以内に特別会計分を含めた貯金がなくなるという状況です。

「2022 年度会計報告」に明記されているとおり、当該年度の会計は五島敦子会員ならびに吉野剛弘会員に監査を依頼し、精細な監査の上会計の適正処理をご承認いただきました。

#### 《審議事項》 2023 年度予算

大学史研究会では、次年度の予算案につきましては、事務局による基本案を総会に提示し、ここでの審議を経て、最終決定をいたしております。例年と同様、2023 年度予算も上記の手順にしたがって予算案を決定しましたので、以下にご報告します。

#### 【 収入案 】

収入は、年会費と紀要売上金の 2 つになります。とりわけ、本研究会の運営経費は、年会費の納入に大きく依存しております。年会費につきましては、例年通りの 600,000 円を収入予定額として設定いたしました。その他の収入についても過去に倣う形とし、総収入額は 1,824,869 円、繰越金を除く総収入額は 610,030 円といたしました。

#### 【 支出案 】

支出案は、新型コロナウイルス感染症の影響の見通しが困難ではございますが、少しずつ社会情勢も人の移動を許容する形に変化している点を鑑み、同感染症流行前の予算案を元に算出いたしました。

紀要『大学史研究』の関連費用は 800,000 円、を発行する予定になっております。編集委員会会議費・交通費は 100,000 円、事務局会議・交通費は 80,000 円としました。その他の諸経費も、ほぼ例年通りの額を計上しております。消耗品費・手数料は 10,000 円、謝金は 30,000 円、通信印刷費は 200,000 円でこれはホームページの費用も含んでいます。予備費として 569,869 円を計上しております。次年度繰越金と予備費をのぞく総支出予算案は 1,255,000 円を予定しており、644,970 円の支出超過となっております。本来は望ましい予算編成ではございませんが、新型コロナウイルス感染症の影響により予算の計画が難しいこと、そして現状の収支の状況では赤字予算は不可避であることをご理解頂ければ幸いです。以上、「2021 年度会計報告」および「2022 年度予算案」につきまして、ご質問ご提案等ございましたら、事務局までご連絡のほどよろしくお願い申し上げます。

(会計担当：山崎慎一)

### 『大学史研究』編集委員会からのお知らせ

『大学史研究』32 号を刊行するにあたり、会員から広く原稿を募ります。投稿に関するスケジュールは以下の通りです。投稿申込期限：2023 年 3 月 31 日。原稿締切：2023 年 6 月 30 日。刊行予定：2023 年 12 月。投稿を希望される方は 2023 年 3 月 31 日までに研究会ウェブサイトに掲載している投稿申込フォームに入力して下さい。投稿募集カテゴリーは、論文、研究ノート、書評、史料・図書紹介です。申込時に投稿カテゴリーの希望を添えていただくことも可能ですし、特に指定されなくても構いません。最終的な掲載カテゴリーについては、審査の上、編集委員会で判断します。なお、申し込み時に「投稿予定の原稿タイトル」を記入いただきますが、最終投稿時に変更も可能です。3 月末までに投稿申込された方には詳しい投稿方法をお知らせします。会員諸氏の日頃の研究成果を広く掲載したいと思っております。多くの投稿をお待ちしております。

(紀要編集委員長：大川一毅)

## 運営委員会からのお知らせ

運営委員会委員長としての仕事と抱負

坂本辰朗

年末から1月初旬にかけて、セミナーの総会で決定した新年度の課題の一つである、日本学術会議協力学術研究団体への加盟申請のために、大学史研究会の設立の経緯をまとめるという仕事に没頭した。改めて当時の文書を読み直し、大学史研究会の果たした役割の大きさというものに圧倒されると同時に、いま改めて、その知的遺産を継承する必要性を痛感した。

それは、どのようなことなのか。当時、発行されていた『大学史研究通信』（現在の『大学史研究』の前身誌）の第1号（1969年1月）の冒頭には、「大学問題もいよいよ深刻化しつつ越年しましたが皆さんにはお褒りありませんか」という文章が書かれている。当時は世界的に、いわゆる“大学紛争”が広がっていた時代であり、日本もまた例外ではなかったわけである。「大学問題の深刻化」というのは、大学が機能不全に陥っている状態そのものであった。たとえば、講座制をめぐる問題や産学協同、学生の身分保障の問題等々をめぐって、文字どおり厳しい対立がおこなわれていた時代であり、そのような中、「大学史の研究」を掲げて新たな会を立ち上げるなどは、ある人たちからは、「火事場で火の用心を叫ぶに等しい行為」と見られていたかもしれない。しかしながら、大学史研究会の創立にあたって中心となった4人の先生方が共通に抱いたのは、「われわれは大学を本当に理解しているのか」という根源的な問いであり、そのためには今こそ、本格的な大学史研究が必要だという認識であった。

翻って20世紀末から21世紀初頭という世紀転換期に起こったことは、アングロ・サクソン大学モデルがもはや、抗うことはほぼ不可能というべき強さと速さをもって、世界的な規模で席卷していったことである。各地の大学に、「〇〇大学教育・学習研究センター」といった施設が続々と創られていったわけであり、このことは、大学史研究会にとっては、表面的には、必ずしも逆風とはならなかったようにも思える。だが、私たちはここで再び、「われわれは大学を——アングロ・サクソン大学モデルを——本当に理解しているのか」という根源的な問いを発するべきではないのか。

大学史研究会は、上記のような、大学を巡る根源的な問いを提起することで、遂には、学術研究そのものの在り方を再考するという地平までに到達した。この知的遺産は、より多くの人々に継承して行ってほしいと私は考える。セミナーの総会で決定した新年度のもう一つの課題として、より多くの会員の獲得のためのキャンペーンがあるが、この課題の意義もひとえに、ここに帰着すると言えよう。むしろ、上記のような意味での、本格的な大学史研究は、時代の要請に応えるものであり、この意味で、潜在的な会員は数多くいると言えるのではなかろうか。

なお、総会については昨年ZOOM会議システムを使って開催された。議事の内容は、山本尚史事務局長による、きわめて的確な議事録が作成されているので、そちらを参照されたい。

（運営委員長：坂本辰朗）



## 編集後記

このたび「大学史研究通信」第 106 号が完成致しました。全国各地で桜の開花、満開の便りが聞かれ、本格的な春の季節を迎えております。会員の皆様につきましては、新年度に向けてお忙しく、落ち着かない日々をお過ごしの方もいらっしゃる事とお察し致します。

引き続き、会員の皆様が安心して教育・研究活動を行えますよう、事務局では、大学史研究会に関する有益な情報を多く盛り込み、皆様にお届けできますように編集を進めて参ります。どうぞよろしくお願い致します。

(通信担当：蝶慎一)

「大学史研究通信」第106号の編集は、事務局・蝶 慎一（香川大学）が担当致しました。  
連絡先：jimu-kyoku [at] daigakushi.jp

「大学史研究通信」第107号は、2023年6月発行予定です。

**大学史研究会**

**<運営委員長>**

坂本辰朗

**<事務局連絡先>**

事務局へのお問い合わせは、下記代表Eメールアドレスまでお願い致します

E-mail: jimu-kyoku [at] daigakushi.jp

**運営委員（五十音順）**

大川一毅（岩手大学）	坂本辰朗（創価大学）
船勢 肇（長崎女子短期大学）	山崎慎一（桜美林大学）
山本珠美（青山学院大学）	山本尚史（筑紫女学園大学）
吉野剛弘（埼玉学園大学）	

**事務局員（五十音順）**

蝶 慎一（香川大学）	原 圭寛（湘南工科大学）
------------	--------------